オスティアの街路沿いのポルティコの機能に関する一考察

瀧本　萌穂

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

テヴェレ川河口に位置する古代ローマ都市オスティアは、紀元前3世紀頃に軍事要塞として成立し、2世紀には貿易都市として発展した。オスティアが隆盛した時期にローマは地中海沿岸に多くの *Coloniae*(コロニア,植民都市[*1])を建設し、多くの植民都市では、ある一定の空間をその中心で直角交差する2本の直線で分割し、その空間を2本の主線に平行な他の直線でさらに分割することで形成した。トラヤヌス帝により紀元100年に建設されたTimgad(*Thamugadi*,現アルジェリア)は、正方形の街区が碁盤の目状に計画され、主要な門へと通じる大通りには両側の左右対称性で権威を示す列柱[*2]が置かれ、ガリア(現ドイツ)の Trier には紀元2世紀に植民都市が建設され、直交・平行の街路による軸線性が都市全体を支配していた。街区の整った計画的な都市を支配下の人々に与えることは、支配域の端までローマの権威を示すための手段の一つであった[(1)(2)]。

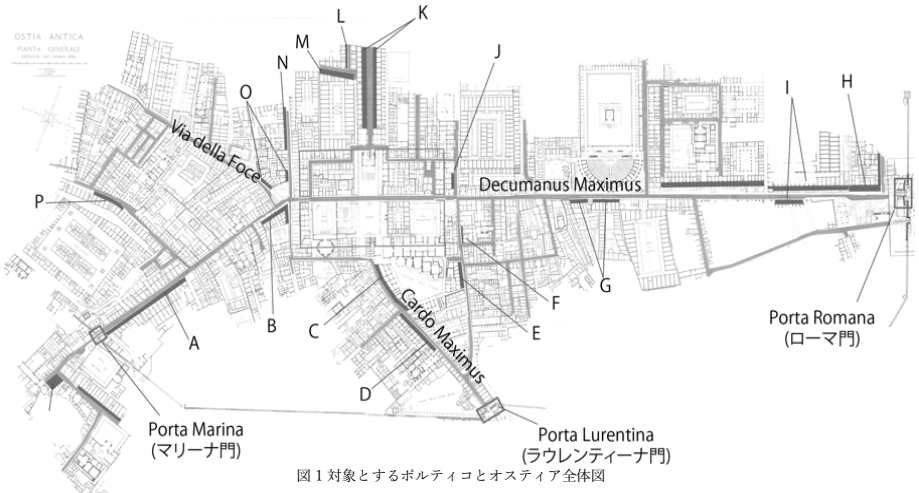


図1 対象とするポルティコとオスティア全体図

オスティアでもポルティコが *Decumanus Maximus* 周辺に7箇所、*Cardo Maximus* の周辺に3箇所、*Horrea*(倉庫)の周辺に6箇所、マリーナ門外に2箇所の計18箇所配置されている(図1)。海洋交易の玄関口として対外的な権威性を示すことは考えられるが、オスティアでは1箇所を除いて街路の片側にしかポルティコは存在せず、植民都市でみられる街路を挟むポルティコの左右対称性は認められない。

古代ローマ時代にはこうした列柱付きの部分については、紀元前1世紀の建築家であるウィトルウィウス(*Vitruvius*)が著書「建築十書(*De Architectura*)」のなかで列柱に関する単語がどのような意味で何回登場するかを分析し、各単語をどう区別して記述しているか川本[(3)]が考察した。ウィトルウィウスは列柱の総称をポルティクス(*porticus*)とし、歩行,運動,訓練などを行う機能のあるポルティクスをアンブラティオ(*ambulatio*)、3面または4面をポルティクスにより囲まれた空間をペリスティリウム(*peristylium/peristylum*)[*3]と称し、機能と形状でポルティクスを区別して表現した。多様な要素が含まれていたと想定されるポルティクスを、場の使われ方や場の囲い方によってウィトルウィウスが区別して呼称しようとした可能性が示されている。

先行研究ではポルティコの機能について、スエトニウス(*Suetonius*)やタキトゥス(*Tacitus*)を参照したG.Hermansen[(4)] の考察が挙げられる。西暦64年に発生したローマの大火の後に、ネロ帝がポルティコの設置を奨励した[*4]とされ、1世紀後半から2世紀前半の帝政期初期の歴史家であるスエトニウスは、火災時にポルティコの上を通るバルコニーから、消火活動を行うためにポルティコの設置が奨励されたと記述している。スエトニウスと同時期のローマの政治家・歴史家であるタキトゥスは、火災に関して、火災で落下してきた屋根材などによって街路や脇道が塞がれて避難できなくなる場合が非常に多かったと記述しており、G.Hermansen は燃える屋根材が歩道に落下することをポルティコが防ぎ、人々の避難経路になったとも考えられている。

以上のポルティコに関する言及を踏まえると、特にオスティアはポルティコに対して権威性以外の性質や役割が想定できるのではないのだろうか。本稿では、オスティアのポルティコの建設が権威を演出すること

よりも実際的な機能の側面に重点を置いている可能性を指摘することを目的とする。

1.2 研究方法と対象

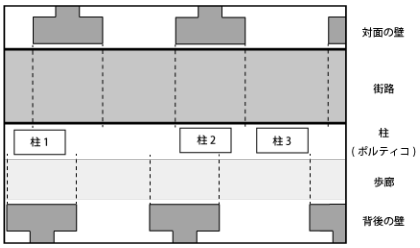
2022 年 9-10 月の筆者によるオスティア遺跡の現地調査を元にポルティコの分布図を作成した。また、レーザースキャニング技術を用いて計測した三次元点群データを参照し、平面図、断面図の測定、各種計測を行った。対象とするポルティコは表 1 に示す A-P の 16 箇所[*5*6] である。

2. 周辺建物の開口部に対する分析

ポルティコが背後の建物と街路を挟む対面の建物の開口部に対して、どのような並びで建設されているかを、点群データから作成した正投影図により分析した。

指示番号	建物又はポルティコの名称	背後の壁	対面の壁
A	Portico and Caseggiato della Fontana con Lucerna (IV,VII,1-2)	一部一致	不一致
B	Taberne dei Pescivendoli (IV,V,1)	一部一致	不一致
C	Caseggiato a tabernae (I,XII,10)	一部一致	不一致
D	Portico e Caseggiato dell'Ercole (IV,II,2-4)	一部一致	不一致
E	Botteghe (I,XII,7)	一致	不一致
F	Caseggiato dell'Invidioso (V,V,1)	一部一致	不一致
G	Portico del Monumento Repubblicano (V,XI,4-5)	一部一致	不一致
H	Magazzini Repubblicani (II,II,1-2)	例外	例外
I	Portico del Tetto spiovente (II,II,6)	一部一致	不一致
J	Caseggiato del Portico delle Mura del Castrum (I,I,4)	不一致	不一致
K	Portico est e ovest di Pio IX and loggias (I,V,2 - I,VI,1)	一致	一致
L	Caseggiato dei Misuratori del Grano (I,VII,1-2)	一部一致	不一致
M	Piccolo Mercato (I,VIII,1)	例外	例外
N	Terme del bagnino Buticosus (I,XIV,8)	一部一致	不一致
O	Caseggiato del Mosaico del Porto (I,XIV,2)	一部一致	不一致
P	Botteghe al Cardo degli Aurighi (III,IX,23-26)	一致	不一致

表 1 .ポルティコと周辺の建物との関係



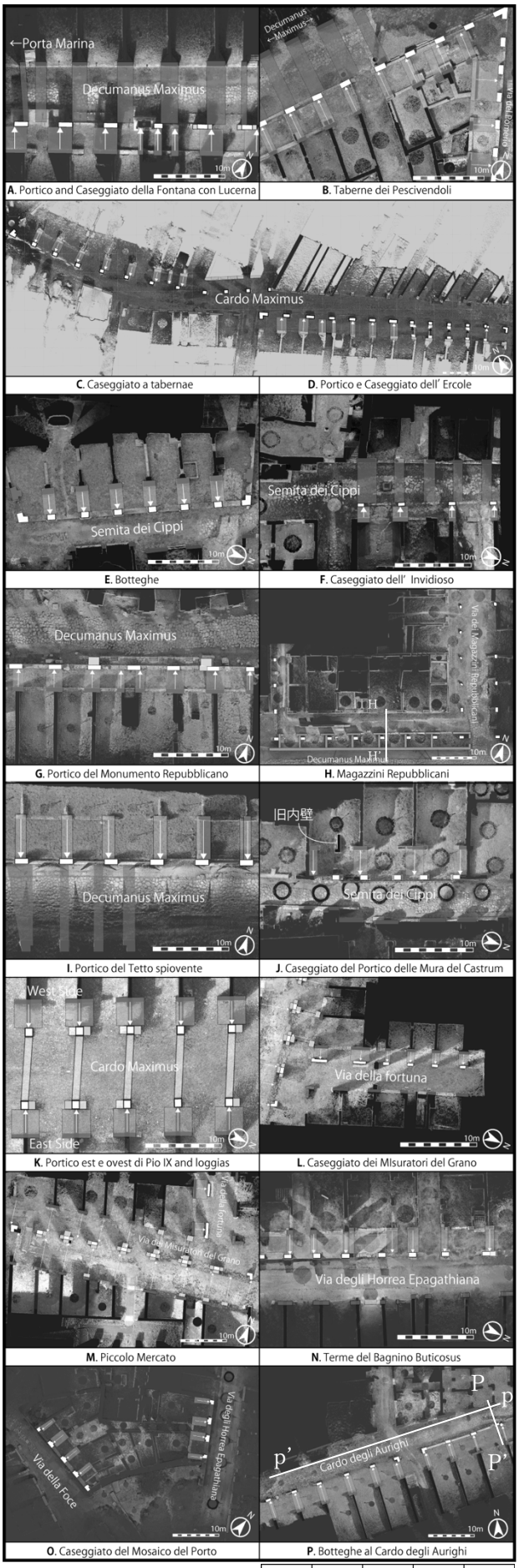
	背後の壁	対面の壁
柱1	一致	一部一致
柱2	一部一致	一致
柱3	不一致	不一致

図 2.周辺建物との評価方法

平面図において(図 2)、柱それぞれ一致、一部一致、不一致で評価し、表 1 では各ポルティコにおいて全ての柱が一致の場合「一致」、1 本でも不一致の場合「不一致」、その他は「一部一致」と評価した。

まず、ポルティコと背後の建物の壁について分析を行った結果、16 箇所のうち E, K,P の 3 箇所が一致、J のみ不一致、A,B,C,D,F,G,I,L,N,O は一部一致であった。H,M に関しては後述する。

次に、街路を挟む対面の建物の開口部と柱の位置について同様に分析を行った結果、16 箇所のうち K のみ一致、H,M を除く残りの 13 箇所は不一致であった。



	柱	付属構造体	背後の壁	対岸の壁
色				

図 3.対象ポルティコの平面図(部分拡大)

例外として H,M に関して述べる。H は、*Decumanus Maximus* 沿いに柱が並び、柱 1 つ 1 つが壁に囲まれ、屋内空間の一部になっている。柱を囲む建物の開口部は主要街路である *Decumanus Maximus* ではなく、北側の小道に向かって開かれている。柱はそれぞれ室内の端に寄っており、北側の開口部には被っていないが、北側の小道を挟む対面の建物の開口部とは被る位置にある。また、H は東側の街路(*Via dei Magazzini Repubblicani*)沿いにもポルティコと思われる痕跡があり、背後の建物の開口部と被る部分がある。*Via dei Mabazzini Repubblicani* を挟む向かい側には、建物に取り込まれているが、*Via dei Magazzini Repubblicani* を挟み対応する位置に同形状の構造体の一部がある。ただ、厳密に位置関係を見ると対岸の構造体は徐々に北に向かって構造体同士の間隔が伸び、北に行くほど街路を挟む向かい合った位置からずれる。

図 4. M の付属構造体

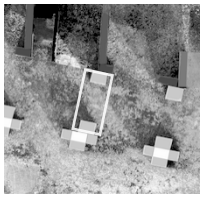


図 5. M 正投影図(拡大)

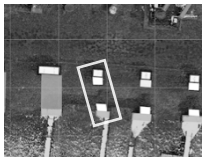


図 6. D 正投影図(拡大)

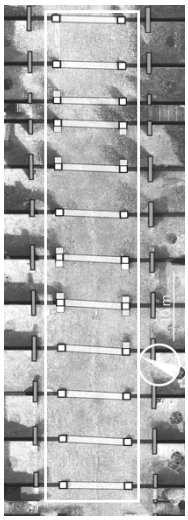


図 7. K 正投影図(範囲拡大)

M は北側の建物にも属していると考えられる。本章の分類では、南側の建物が背後の建物、北側の建物が対面の建物と言え、M の柱本体は両側の開口部に対して一部一致に分類されるが、M では両端を除く柱の全てに付属構造体があり、付属構造体と両側の建物との並びで見ると以下の特徴がある。背後の建物と対面の建物にも一部に壁に付随する形で付属構造体があり、特に図 3 の M の右端から 4 本目のポルティコ(図 5.の拡大図)は、柱本体の四方に付属構造体を設けるのではなく、向かい合う建物の付属構造体と並びが一致する方向に寄せて設けている。付属構造体で建物と柱を接続している箇所は D でも見られる。D の一部の柱には、背後の建物と向かい合う側に付属構造体があり、図 6 で柱本体は背後の建物に対して不一致と評価されるが、付属構造体は向かい合う付属構造体に対して作られていることが分かる。

最後に、両側に対して一致の評価であった K について述べる。K はオスティアで唯一街路を挟み両側にポルティコがある箇所であり、両側で向かい合う位置に柱が並ぶ(図 7)。向かい合う柱を繋ぐと柱同士の位置がずれており、厳密には左右対称ではないことが分かる。

対象ポルティコ 16 箇所について、13 箇所は対面の建物を考慮しない位置に配置されている。背後の建物に関しては、一致が 3 箇所のみであり、H を除く他のポルティコは一部一致や付属構造体同士で向かい合うようにするポルティコであり、厳密にポルティコの位置と背後の建物は揃わない。従ってオスティアでは、ポルティコを建設する際の周辺の建物の開口部に対する設置方法に関して規則性がないと言える。

3. 歩廊と街路面の高さの分析

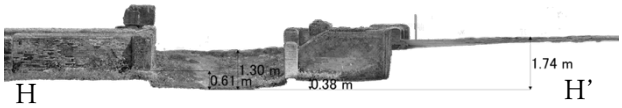


図 8. HH'断面図(図 3 のポルティコ H)

図 9. PP'断面図(図 3 のポルティコ P)

ポルティコと背後の建物によって生じる間の空間(以下歩廊と表記)が街路を歩く際に利用される歩道の機能を持つかどうか、歩廊と街路面の高さから分析を行った。H,P の 2 箇所について、H は街路(*Decumanus Maximus*)に対して 1.74m 低い(図 8)。P は街路(*Cardo degli Aurighi*)や対面の建物よりも柱と背後の建物が 0.35m 低いが、西に向かって歩廊と建物が上昇し、街路と歩廊が等しい高さになる(図 9)。L,M は歩廊と街路の高さに大きな差がなく、残る 12 箇所は全て街路面より歩廊が高い[*7]。オスティアでは都市全体で地盤の嵩上げが行われているため[(5)]、ポルティコの端から端までの間で街路面が緩やかに上る箇所が多数あるが、街路面の勾配に伴って歩廊の高さも大きく変化することは、街路面より歩廊が高いポルティコ(表 2)では少ない。また、歩廊の街路に対する高さはオスティアのポルティコ全体で一定の値を示さず、

図 10. pp'断面図(図 3 のポルティコ P)

最大でGでは1m以上歩廊が街路より高い。Gでは街路から歩廊へアクセスする階段が設けられている。

16箇所のうちH,P,L,Mを除く12箇所は街路より歩廊が高く、街路の変化に依存することは少ないため街路を歩いて移動する際に利用する「歩道」の機能はなく、背後の建物に属した構造物であると言える。

4. ポルティコの建設年代と材料に関する分析

指示番号	背後の壁	対面の壁	街路面に対する高さ	建設年代
H	例外	例外	低い	1世紀半ば
N	一部一致	不一致	高い	112年頃
P	一致	不一致	低い	トラヤヌス帝期(98-117)
A	一部一致	不一致	高い	120年頃
K	一致	一致	高い	120年頃
L	一部一致	不一致	等しい	120年頃
M	例外	例外	等しい	119-120年頃
I	一部一致	不一致	高い	ハドリアヌス帝期(117-138)
J	不一致	不一致	高い	ハドリアヌス帝期(117-138)
F	一部一致	不一致	高い	アントニウス・ピウス帝期(138-161)
E	一致	不一致	高い	160年
B	一部一致	不一致	高い	2世紀
D	一部一致	不一致	高い	160-170年頃
G	一部一致	不一致	高い	コモドゥス帝期(177-192)*8
C	一部一致	不一致	高い	コモドゥス帝期(177-192)*8
O	一部一致	不一致	高い	コモドゥス帝期(177-192)*8

表2.ポルティコの建設年代(6)(7)(8)(9)(10),*8

ポルティコが建設された年代について先行研究では言及されていないため、ここではポルティコが付随している建物の建設年代で分類を行う。建設年代で表1を並べ替えて、3章の高さの関係を加えたものが表2である。

H以外のポルティコは全てコンクリート造(*Opus latericium*)であり、Hは軟質凝灰岩(*tufa*)で作られている。Hの対面の建物には一定の間隔でポルティコと同じ軟質凝灰岩の構造体が確認できる。Hの周囲の建物は4段階の建設・改築段階を経ており元の形状は分からない(7)が、Hは対面の建物の外周を囲むように並び、Hと対面の軟質凝灰岩の構造体同士は向かい合って建設されていない点から、建物の構造と柱が別々の構造である可能性がある。

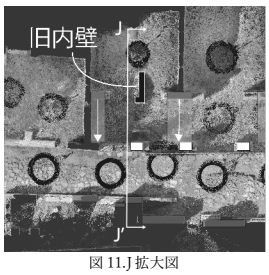


図11.J拡大図

また、2章で唯一背後の壁と関係なく建設されていたJの背後の建物より低い位置に軟質凝灰岩による壁(図12 旧内壁)が見つかっている。この壁はハドリアヌス帝期に街路が嵩上げされる前の間仕切り壁であると考えられている(7)。街路面以下の柱基礎部分は間仕切り壁が埋没している低い地盤まで続いている。ポルティコは街路の嵩上げに合わせて伸長した(7)と考えられている。Jでは間仕切り壁が改築に合わせて失われるがポルティコは残り、嵩上げ・改築後の建物の開口部に対して重なるようになったと考えられる。

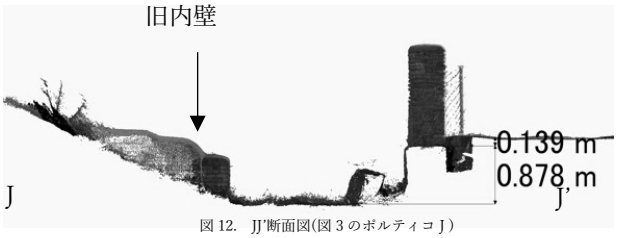


図12. JJ'断面図(図3のポルティコJ)

H,Jから、改築・街路の嵩上げに伴って背後の建物の開口位置が変わっても柱の位置を変えず、改築後の建物開口部と柱が重なることは考慮せずに改築を行なっている可能性がある。加えて、Jからは街路高さに合わせて改築する際ポルティコの高さも伸長している点から、ポルティコを設けていることに利点があった可能性がある。

5. まとめ

ポルティコと対面の建物との関係から、ポルティコに明確な軸線性は確認されなかった。また、歩廊は街路ではなく背後の建物に属し、背後の建物が改築される際にはポルティコが伸長して残される理由があったと考えられる。

1章で示した防火機能について、スエトニウスの記述に関しては、本稿では上部構造の分析を行なっていないため検証不可であるが、タキトゥスの記述に関しては街路を越えて歩廊を渡り逃げることは可能である。本稿の分析のみではポルティコの具体的機能にまで言及できなかったため、ポルティコと地盤面の高さや背後建物の改築を考慮してさらに分析することを今後の展望とする。

【注釈】

*1 これは都市発展による人口増加や退役軍人の住居不足、支配域の拡大に伴う準要塞の必要性に起因し、移民団を形成しては各地へと植民を行った。

*2 本稿では街路沿いの列柱をポルティコと表記する

*3 ベリスティリウムが、ポルティコによるフレームワークのみを意味するのか、周囲の建物を含めた領域を含むかは不明

*4 ネロ帝がポルティコの設置を奨励した目的に関する文献史料は発見されていない

*5 3つの新市門(図1)に囲まれた領域内で分析に必要な点群データがある箇所を対象とする。

*6 Pについてはポルティコ背後の建物に固有の名称がないため、筆者が本稿における名称をつけた

*7 歩廊が土に覆われている部分に関しては背後の建物の敷居を歩廊の高さとした

*8 マルクス・アウレリウス・アントニヌス帝とコモドゥス帝の共同統治 177-180 年とコモドゥス帝の単独統治 180-192 年を合わせてコモドゥス帝期として表記している

【参考文献】

(1) Fikret Yegül, Diane Favro, Roman Architecture and Urbanism: From the Origins to Late Antiquity, 2019, p36-38, p496-507

(2) F. HAVERFIELD, ANCIENT TOWN-PLANNING, 1913, 2022/11/30, https://www.gutenberg.org/files/14189/14189-h/14189-h.htm

(3) 川本悠紀子, The Colonnaded Space in Vitruvius' De Architectura, 2020, p19-23

(4) G.Hermansen, Ostia: Aspects of Roman City Life,1982,p1-13,p211-213 p217-223

(5) 堀賀貴,オスティアにおける共和政期の地盤面と帝政期の街路面の地形学的分析 オスティア・ローマ都市研究 III,2017

(6) Alessandra Batty, The Domus del Ninfeo at Ostia (III, VI, 1-3) Structure, Function and Social Context, 2018, p10-16

(7) Carlo Pavolini, Guide Archeologiche Laterza, 2006, p55, 57, 79, 98, 108, 117, 123, 195, 206, 221, 236

(8) James E. Packer, The Insulae of Imperial Ostia,1971, p142, 148

(9) Rina Cervi, CITTÀ E MONUMENTI NELE' ITALIA ANTICA, 1998, p144

(10) Russell Meiggs, Roman Ostia, Oxford at the Clearendon Press, 1973, p538

【図】1-3.筆者により作成　4.筆者により撮影　4-12.筆者により作成